



伊達市立保原小学校物語

子供達と教師の絆

制作：東北まち物語つたえ隊、(社) まち物語制作委員会
文・絵／いくまさ鉄平
公益財団法人 大和証券福祉財団助成金にて制作



主任教諭「1～2年生はあの子たちで最後ですか？」

教諭1「はいあの子たちで最後です。今、学校で残っているのは3年生以上です」

主任教諭「もうすぐ卒業式ですね」

教諭1「そうですね。来年はこの校舎ともお別れです。入学式は新しい校舎ですからね。よく持ちましたよ」

主任教諭「本当です。なにせこの校舎ができたのが、昭和42年ですからね。もう50年ですよ」

教諭1「何時倒れてもおかしくないですね」

主任教諭「はははは、本当です」



ゴゴゴゴゴ

主任教諭「なんなんです」

教諭1「地震じゃないですか？」

ぐお〜ゴゴゴゴゴ

教諭2「きゃー」

主任教諭「おおきいですね」

ドンガシャン、ぐお〜ん、どどどどどお〜

教諭1「つつかまれ」

教諭2「きゃー」



主任教諭「お、おおさまりましたか？」

教頭「ええ……みつみたいです」

教諭2「子ども！子どもたちは、だいじょうぶ！」

教頭「校長は？」

主任教諭「中学校の卒業式から帰られて、直ぐに会議のため出かけられました」

教頭「どうします？」

主任教諭「とにかく子供たちを訓練通りにがしましょう。先生、ここを頼みます。私、教室をまわってみます」



教頭「先生、校内放送、とにかく皆に校庭に逃げるよう放送してください」

教諭2「だっだめです。地震でマイクのコードが切れて放送機材が使えないんです」

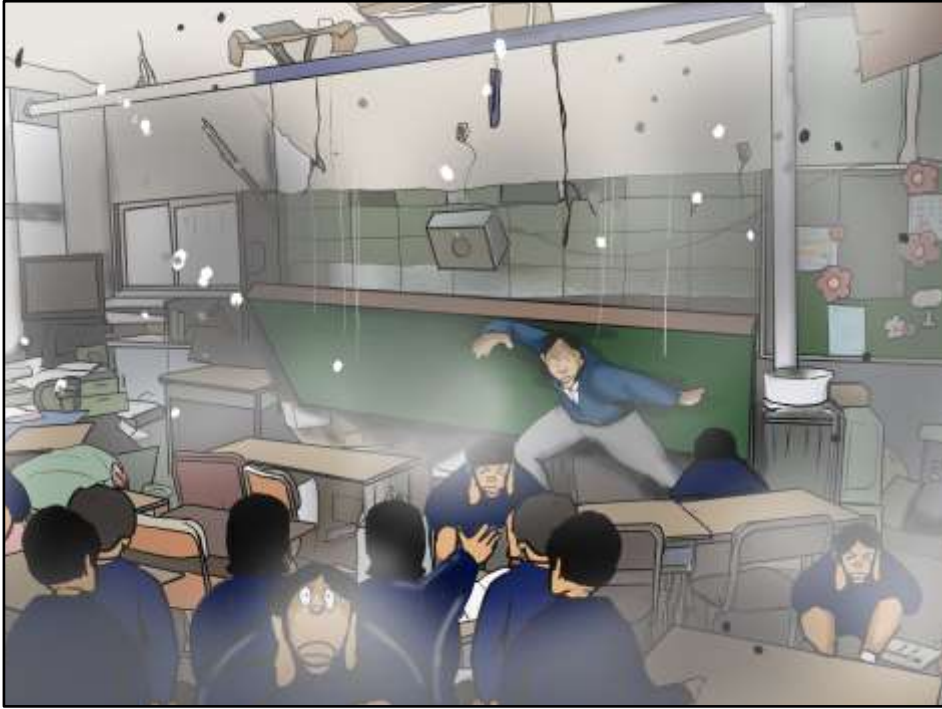
教頭「分かりました。既に主任に回ってもらっていますが、皆さんも教室をまわってください」

教諭2「分かりました。教室を回り校庭に子供を集めます」



キャー、
生徒1「先生、怖い」
生徒2「どうなるの？もう出てもいい？」
生徒「うえ～ん」
教諭「みんな落ち着け、だいじょうぶか？ケガないか？」
生徒2「先生、怖いよ～」

主任教諭「先生、訓練通り、校庭に避難させてください」
教諭「先生、となりとなりの教室に行ってみてください。すごい音がしたんです。何かあったみたいです」
主任教諭「わかりました」



NA:隣の教室に飛び込んだ主任教諭は目を見張ります。なんと倒れ掛かった黒板を担任の先生が背中で必死にささえ、その隙間から子供たちを逃がそうとしていたのです。

主任教諭「先生、先生、大丈夫ですか」

教諭「お願いします。子供たちを子供たちを」

主任教諭「わかりました。みんな、こっちだこっちへこい、外へ出るぞ。…先生、頑張ってください」

教諭「大丈夫、私は大丈夫です。それより早く、子供たち子供たちを」

主任教諭「ほこりを吸い込まないよう手で口を覆って！さあ、みんなこっちだ！こっち！外に出るぞ」



NA: 日頃の訓練のたまもの、一人の犠牲者を出すことなく700人の子ども達を校庭に逃がすことができました。このとき校長先生が会議に行くのを取りやめ帰ってきたのです。

校長「クラスごとに点呼。全員いるかどうか報告」

教諭「3年4組、全員います」

教諭「3年5組、大丈夫です。一人のけが人もいません」

教諭「3年6組、全員大丈夫です」

ゴゴゴゴ

校長「余震だ！」



ゴゴゴゴゴ

教諭「みっみろ！ あああ、あれ！！」

ゴゴゴゴゴ

校長「校舎、校舎が倒れるぞ」

教諭「すごい左右の校舎が前後にゆれている」

校長「3階建ての建物があんなにまがるなんて！！」



生徒1「先生、こわーい」

生徒2「わーん、わーん」

生徒1「こわいよ、先生こわいよ」

教諭「大丈夫、大丈夫だから、先生がいるから大丈夫よ」

校長「子どもたちは建物を見ないで！みんな見るさ！トラウマになります。先生たち子供たちに見せないようにしてください」

NA:改修に改修をかさねた古い校舎です。グワングワンと音を立てながら前後に傾きます。30cm以上は動いたと思います。その姿、校舎が最後の力を振り絞って子供たちを守るべく必死で耐えているようでした。



NA「地震発生時は2時46分、ちょうど低学年が下校して直ぐのときでした。そのため、校長先生は近隣を探しに行くよう先生に指示をだしていました。約1時間たったころ先生が1年生2年生を連れて帰りました」

教諭3「校長、1, 2年の子どもたち無事連れ帰りました」

校長「どっどこにいたんですか」

教諭3「下校して直ぐだったので近所を探しに行ったら、保原高校の子どもたちがかくまってくれてたんです」

校長「よく無事でしたね」

教諭3「高校の前で泣いていたみたいで部活の子どもたちが機転をきかせ校庭に入れてくれたそうです」

校長「よく助けてくれました」

教諭3「本当です。他にも多くの子どもたちが町の人に助けられていました。全員の無事を確認できました」



NA: 慌てて逃げた為、子供の中には裸足の子もいました。その日はとりわけ寒く、雪交じりの雨がつよい風にあおられ子供たちを襲います」
主任教諭「何とかしないと、子供たちが凍えてしまいます」
教諭「そうだ！ブルーシートがありましたよね」
主任教諭「倉庫にありますが・・・何をするんですか？」
教諭「壁を作るんです。風だけでも防げたら、随分、違うと思います」
主任教諭「分かりました。皆で壁をつくりましょう。手の取れる先生、集まってください」



校長「先生はブルーシートをかかげてください。お父さんも手伝っていただけますか！」

教諭「さあ、子供たちを囲むんだ！、子供は中に、みんな中に入って」

校長「少しは違うだろ」

母親「先生、私たちも持ちます」

校長「ありがとうございます。たすかります」

生徒「僕も持つよ」

教諭「いいから中に入れ、直ぐに家族が迎えに来てくれるから。大丈夫だからな。頑張れよ」

生徒「先生、ありがとう」



ぴか！ゴゴゴロ(雷の音)

びいゆーん(風の音)

ゴゴゴゴゴゴ(地震の音)

教諭「いいから、いいから、皆、輪になってできるだけ体をくっつけろ。少しはあったかいからな。頑張れよ、みんな頑張れよ」

主任教諭「壁を狭めましょう。先生も少し休んでください。先生、黒板が倒れてきたとき肩いためてたでしょ」

教諭「ああそうでしたね。すっかり忘れていましたよ。しかし、これじゃあもたないですね。なんとかしないと」



教諭1「そうだ、車だ！車を使おう！先生方！先生方！車！車を集めてください」

教諭2「車をどうするんです」

校長「子供たちを取り囲むんです。そしてかわるがわるに暖を取るため子どもたちを車の中に避難させてください」

教諭2「分かりました」



「校長、殆どの子どもたちを保護者に引き渡しました」

校長「そうですか。それはよかった。残った子供たちは何人ですか？」

「5人です」

「保護者に連絡がつかない人いますか」

「大丈夫です。みんなに連絡はとれました。今、皆さん向かっています。午後7時頃には皆さん迎えにこられると思います。」



NA「その日は唯一無事だった児童クラブのプレハブの建物に校長先生と教頭先生が泊まりました。そして翌朝、夜明けとともに校内を見回りました」

校長「見てください、このガレキを・・・」

教頭「よくあれだけの地震で一人のけが人もです。よかったですね」

校長「本当です。奇跡ですよ。教頭先生も少しは寝れましたか？」

教頭「いやいや、とても寝る気には・・・今日は日曜日だからいいけど、月曜日はどうします？」

校長「教育委員会に相談しましょう」



「いやあ今は無理でしょ。それに連絡をとるといっても、電話もなにもここでは使えませんから・・・そもそも連絡がとれないですよ」

「とにかく仕事ができるように考えましょう」

「パソコンは何とかなりませんか？」

「仮に何とかなってもLANが使えないと仕事になりませんよ」

「3年の先生に得意の方があられるのでお願いしてみます、外部にはつながらなくても内部のLANは構築してくれると思います」

「しかし先生たち来てくれますかね。自宅もたいへんなことになっているでしょうから」



NA「翌日、休みにも関わらず殆どの先生は登校し、その後の対応に奔走したのです。思っていたより、随分早く、教員室内のLANは構築され、なんとか仕事ができるようになったのです。しかし問題は山積みです。中でも問題だったのは4月以降の新年度をどう迎えるかです。とても校舎は使える状態ではありません。新しい保原小学校の校舎完成は来年の3月です。そこまで700人の子どもたちを受け入れる教室がありません。私たち現場の教員は何をおいても子供たちの行き先を探さなくてはならなかったのです」



教頭「校長先生、学校再開の場所ですが、なぜ公民館はだめなのでしょう。あそこなら750名の子供たちを一度に受け入れることは可能ですよね」

校長「私もそう思ったのですが、あそこは原発事故による避難者の収容施設となっています。その状況が続く中、学校への転用は難しいというのが市の考え方なんです」

教頭「じゃあどうするんですか？」

校長「校庭にプレハブを建てればいいんじゃないか」

教頭「その案も考えられていますが、とにかく資材が手に入らないんです」

校長「新学期まで2週間もないんですよ。どうするんですか」

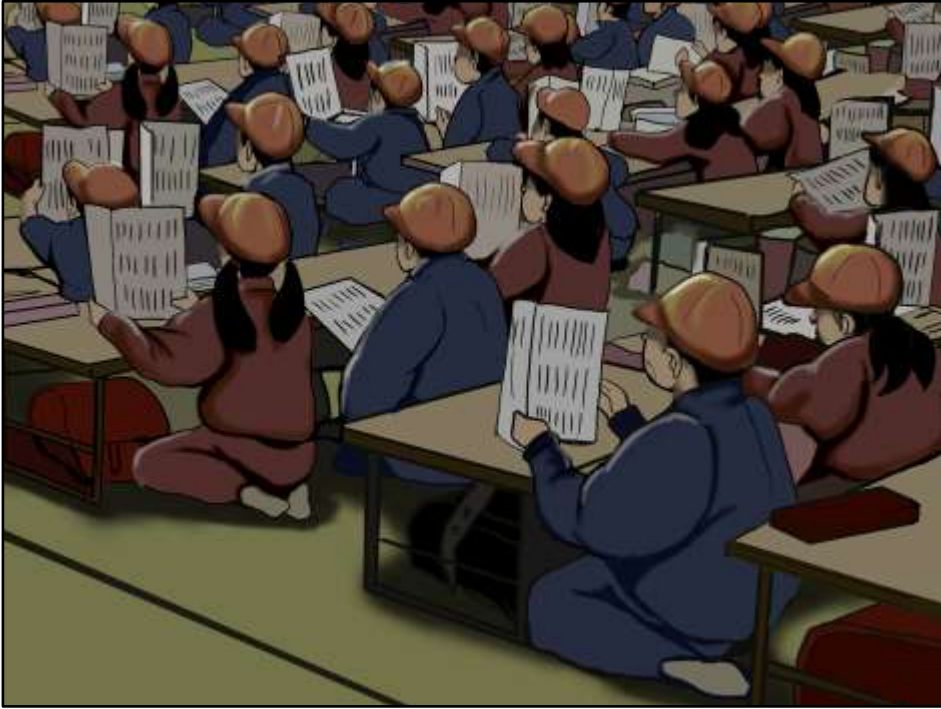
教頭「当面学校の再開は4月6日年桃陵中学校を借りて行おうと思います」



校長(あいさつ)「震災からひと月を迎えようとしていますが、こうして入学式始業式を迎えられたことを嬉しく思います。これからしばらくはこちらの中学校をお借りして授業を行うこととなります。不便なことも多いですが、皆で力を併せてがんばりましょう」

教諭(司会)「つづいて生徒指導の先生からお話があります」

生徒指導教諭「皆さん、なれない学校ですが来年には新しい保原小学校ができます。それまでの辛抱ですががんばりましょう。今後、登下校の際は運動服を着用し、放射線の防護のためにもマスクを着用しましょう。昼休みなどもできるだけ外にでないようにしてください。これから教室となる場所に戻りますが、応急の施設です。非常口の確認、トイレや下駄箱も各自、よく確認してください」



校長「机も椅子もないからといって床の上に座卓で授業とは…まるで寺小屋ですね」

教頭「校長先生、無理です。中学校も再開します。そうしたらうちの生徒を加えると1300人以上が生活することになります。とても授業を続けられる状況ではありません」

校長「わかっています。教育長とも話しているのですが、分散するしかないと思っています」

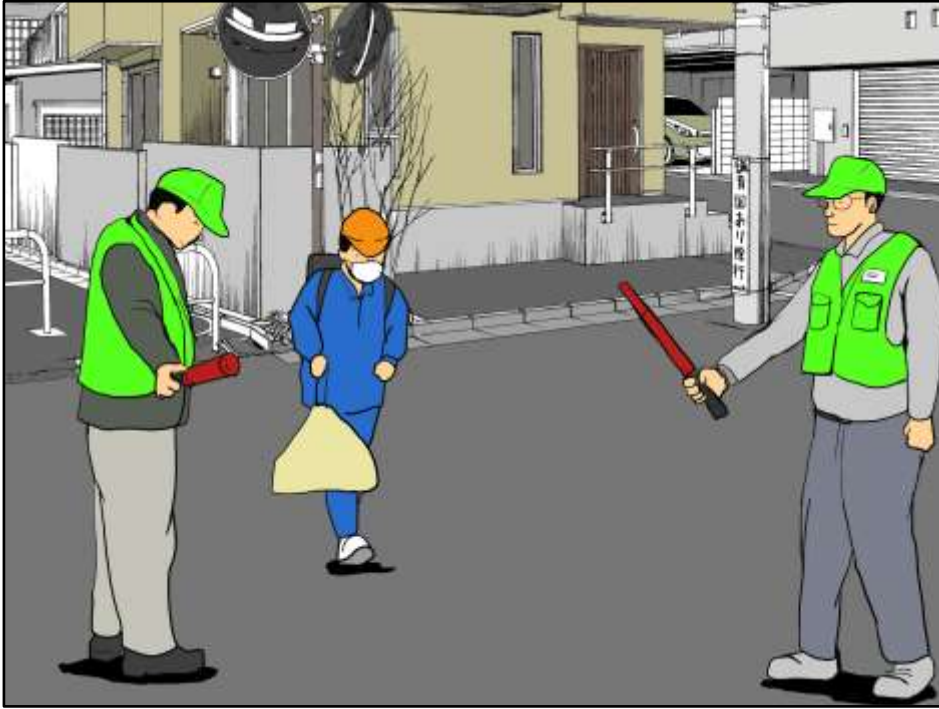
教頭「といううと」

校長「まず低学年は旧泉原小学校へ移そうと思います」

教頭「旧泉原小学校ですか。あそこは遠いですよ。低学年には通えというのはムチャでしょ」



校長「バスを用意します。既にバス会社と契約が成立し5台のバスを確保しました」
教頭「子どもの負担は大きいですが、学校に通えないよりはましですね。分かりました。で何を最初にすればいいのでしょうか？」
校長「まずは保護者に理解していただかないといけないので説明会を開きましょう。用意をお願いします」
教頭「わかりました。…でも、バスに子どもたちをどう誘導するのですか、どこからバスにのせるのですか」
校長「発着場は市役所の駐車場を考えています。役場があく8時頃なら大丈夫とのこと。あそこからだと旧泉原小学校まで20分でいけます」



教頭「通学路の安全確保はどうするのでしょうか。我々だけでは無理ですよ」
校長「交通安全協会、見守りたいの他、教育委員会の職員も通学路に立ってくれます。教育長も立つと言ってくれています」
教頭「中学年、高学年は？」
校長「中学年8クラスは松陽中学に行ってもらいます。高学年9クラスと特別支援学級3クラスは桃陵中学校です」



NA: 校舎全壊から1か月、4月11日には新しい教室を確保、子どもたちは大震災の中において教育をうけることができました。2011年11月には取り壊しが決まった校舎に別れを告げようと卒業生や地域の人々の手によりお別れ会が行われました。そこには子供たちによる「さいごまでわたしたちを守ってくれてありがとう!」の横断幕が掲げられたのです。

伊達市最大の保原小学校のこども1千人を無事避難させた教員、地域の人々。そして、震災で使用不能になった校舎にかわり、子どもたちに学びの場を提供した教員並び行政関係者にこの物語を送ります。おしまい。